

書評

『ハレー彗星物語』

長谷川一郎 著

昭和59年7月刊, 恒星社, 2400円

彗星軌道研究では本邦第一人者である著者がその蘊蓄を傾けて書いた好著。「物語」とあるとおり、大変くだけた文体で綴られているが、内容は重厚な総合報告またはソース・ブックとも言うべきで、特に巻末の補注は労作である。だから、この表題のために通俗書に分類されてしまいそうなのは惜しい。

本書の内容は、まず現在接近中のハレー彗星をいち早く発見したアメリカ天文学者のニュース解説から始まり、エドモンド・ハレーの伝記・彗星軌道の説明とつづき、やがてハレー彗星についての古代史料の詳しい紹介に入る。この著者は天文史に詳しい人だから、ここの数篇は彼の独壇場といえる。さらにヨーマンス・キャンによる最近の研究(1981)であるハレー彗星のB.C. 1404年以降の回帰ごとの軌道要素を紹介し、またB.C. 616年以降の回帰ごとの天球上軌跡を図示しているのは素晴らしい。ハレー彗星に関連のある流星群の解説もあり、今回の回帰(1986)における各国の宇宙探査計画を紹介

し、最後には次回(2061)の出現予想にまで及んでいる。つまり本書は時宜にかなった「ハレー彗星のすべて」である。

ハレー彗星の接近がいよいよ唱えられる昨今、ハレー彗星についての「愚にもつかぬ本(著者筆)」がいくつか出版されたと執筆者名を挙げて批判しているのは著者の科学者としての正義感のほとぼりなのであろう。

最後に少しく望蜀の忠言を呈する。(1) 12ページに、「この彗星はあるイギリス人(ハレーのこと)によって初めて発見された云々」とあるのは誤訳である。これは周知のとおり、ハレー晩年の名文句であり、このことは、つまり彗星が回帰することは、とせねばならない。(2) 巻末の表に、B.C. 年とマイナス年(天文年代学的な年数の数え方)とが並記されているが、両者の区別を注記して欲かった。アマチュアの故野田博氏も両者を混同していたし、このごろは若いプロもその区別を知らぬ人がいるようだから。正解は例えば、B.C. 240年 = -239年である。

(斉藤国治)



工作による 天体観測

村山定男 監修 B5・154頁・定価2500円

積極的に観測器具や技法を考案し、天体観測にチャレンジするための手引書である。

【内容目次】 天体観測のすすめ／観測器械の基本操作(天体望遠鏡の基礎知識／天体写真の撮り方／マイコンによる天文計算)／工作による観測(日時計・月令早見・星座早見の製作／太陽の大きさ／太陽の自転／月の距離と大きさ／月のステレオ写真／フォーコー振り子／人工衛星の軌道計算と観測／恒星の分布模型／星比の測定／恒星の明るさと色の測定／太陽熱を測る／対物プリズムによる天体観測／グレーティングを使った簡易分光器／直視分光器による太陽スペクトル／面光源用の低分散スリット分光器の製作)。

ジャストロウ・トンプソン天文学

R.Jastrow, M.Thompson 著／佐藤文隆他訳
目次：宇宙の中の地球／宇宙の概観／光の性質／天文学者の道具他 B5・620頁・15000円

天体写真入門 (共立フォトグラフィックシリーズ)

林 次次著
目次：天体写真用器材の基礎知識／テーマ別天体写真の写し方他…… A5・152頁・1500円

宇宙に生命を探る上・下

D.Goldsmith 他著／桜井邦朋・深田 豊訳
目次：全体としての宇宙／生命／太陽系での生命の探索他…… 四六判・(各)1800円

スペースシャトル - 宇宙連絡船の全貌 -

増田純男著
目次：宇宙実用化時代の到来／シャトル軌道船／乗組員の構成と訓練他 B6・256頁・1400円



112 東京都文京区小日向4-6-19 共立出版 電話03(947)2511／振替東京1-57035